

## ●特集● 第58回大会レポート(大妻女子大学)

保育学会の年次大会は保育の研究と実践を深め、発展させていく上で重要な意義をもっています。今年も多くの会員が大会に参加され、活発に意見を交換し合いました。今号では、第58回大会においてなされた会員の交流を紙面の上で継続させ、大会において提起された問題をさらに深めていきたいと考え、準備委員長を含めた6人の方に第58回大会をレポートしてもらいました。

### 第58回大会を終えて

第58回大会準備委員長 大場 幸夫

日本保育学会第58回大会は、平成17年5月21日(土)及び22日(日)の両日、大妻女子大学を会場にして開催された。都心の会場で、比較的アクセスもよく、延べ3000人の参加者を迎え盛況であった。大会は、「こどもを原点に一保育実践研究の再構築」をテーマにして、記念講演、学会緊急シンポジウム、2つの公開講演、対談、企画シンポジウムⅠ～Ⅳなどがプログラムに組まれた。2日目の学会総会は、引き続きで学会緊急シンポジウムを組んだこともあり、例年より出席者が多かったことに注目している。学会発表は、口頭発表が376件、ポスター発表が122件、ビデオ発表が7件で、総件数は505件であった。ポスター発表が例年に比べて増加していた。

準備という仕事に携わり、今回のことをふり返るなら、スタートから困難なハードルをいくつも越えなければならなかった。学会事務センターのトラブルにより学会事務に関する作業を任せる新たな事業者の選定、責任体制が最後までとれなかった事業者との仕事の調整の取りにくさ、大学における単独の学科スタッフによる準備体制づくりの難しさなど、終了の時間がくるまで、それどころか実質的に会期が終了した後も、残務処理の面で、スタッフには苦労を掛けることになった。

今回、大会準備委員会としての反省点は沢山ある。ふり返ってみて、開催決定以降の主要な点を箇条書

きに挙げてみると以下のようなことになる。

(1) 大会の基本的なテーマの設定は、前年度までの学会大会の取り組みを参照して、独自の主題となるように工夫すること。

(2) 大会準備の組織づくりでは、できるだけ早期に学会事務局と打ち合わせを行なうこと。それによって、大会に関わる作業の全体を描き出すこと。

(3) 前年度までの大会準備委員会が残してくれたマニュアルを参照し、①大会当日までの準備、②大会初日から2日目終了時以後の片付け作業まで、③そして大会終了後の事務処理、までを仕事の流れ(タイムスケジュール)として把握すること。

(4) かつて学会事務センターに依頼していた事務的な仕事を請け負う事業者には、こうした一連の学会独自の作業への理解を徹底し、単なる集金係ではなく学会大会開催への"客対応"を主たる仕事とすることに、十分な認識をもって連携してもらう必要があること。

(5) 会員への大会参加及び発表申し込みの時点で、会場の現実条件、ルールなどを周知し、当日のトラブルを予防する措置をとっておく方がよいこと。例えば、パワーポイント使用の可否、当日配布資料等の準備など、できるだけ発表会場の詳細について理解を求めておくこと。

(6) 私見になるが、このほか、大会ポスター発表やビデオ発表という形式が研究奨励賞の対象にならないという現行のルールは、これらの発表に研究としての正当性をみないという学会の考え方を表しており、その点は見直すべきではないだろうか。今回のポスター発表会場で、熱のこもった疑問を見聞きする限り、賞の対象外にいつまでも置き去りにする問題ではないと思われたからである。

ひたすら大会準備に忙殺される1年間であったことは否めない事実であるが、大会企画運営という課題に取り組んだ経験を活かし、大会以降の学会活動の一環として、自主的に関与することのできる実践的研究活動ができないか、検討してみたいと思っている。

## 日本保育学会緊急シンポジウム

### 「今、保育の危機に保育学会は何をなし得るか」から 阿部 明子

このシンポジウムには大勢の方が参加されていますので、内容についてよりもテーマに対する私見を述べたいと思います。

保育の危機と言われて久しくなりますが、保育に関わっている私たちの捉え方と社会一般の関心には大きなずれがありましよう。

本年1月1日、日本経済新聞第一面の最初の大きな見出しには「少子に挑む一ニッポン大転換」とありました。その後、しばらく連載され今もボツボツと国の施策に沿い、また経済界の動向から、ワーキングマザーや企業の態勢、例えば、延長保育や男性の育児休暇取得の問題などが取り上げられています。けれども、その視点はあくまでも経済的な面や労働状況など社会構造にあり、私たちが考える子どものよい成長・発達や子どもの生活、そして保育の質の観点からまとめている記事は見当たりません。子どものことは専ら学力低下が問題とされる位で、最も人間としての基盤が育つ乳幼児期からの問題の分析や把握、環境との関わりなど、更には、社会への提言は皆無といってよいでしょう。保育所の民営化の記事で、保育の質が落ちるとの反対が保護者からあるとしてあったのが1回位でしょうか。

シンポジストの方々は、何らかの形で国の行政や地方行政に関係しておられ、その実際の動きと共に無力感をも語られていました。日本保育学会としても、先年行政機関やマス・コミに対して小冊子を送って保育の問題を提言しましたが、全くといってよいほど反応はありませんでした。

小川会長が述べられているように、本学会は学術研究の団体ではありますが、保育に関しての啓蒙も行っていかなければならないと思います。鳥取大学の村山祐一氏の発言にあったように、地域での活動に学会員が力を貸していくことがまず必要でしょう。最近地域活性化を含めて、住民参加の活動が徐々に行われはじめました。千葉県市川市では「あなたが納める市民税の1%をどう使うか決めてください。(およそ1%の税額は3億円)」という日本ではじめての制度をスタートさせました。市内のNPOや住民団体のなかから、支援したい組織をひとつ選んで申請すると補助金として届けられる仕組みだそうで、今年は子育て支援や少年野球教室を含むさまざまな分野から申請があり、約1340万円が渡されたと言います。

小児科医たちがテレビの視聴について提言した時は、マス・コミがさっととりあげました。医師の社会的ステイタスが残念ながら保育関係者より高いからでしょう。連携をどうとるか重要課題です。また、まだまだ保育は子守りでよいとの無意識の意識がある現在、説得力を持った保育者の養成も私たちの任務であると考えさせられます。問題は多くても、少しずつやるより他ありません。

#### ●Profile

阿部 明子 (あべ あかし)

東京家政大学名誉教授・(福) 同胞援護婦人連盟理事長・

子どもの文化研究所所員

子どもたちの健やかな成長を願って、保育者の現職教育、子どもの文化学校の企画、そして児童養護施設と母子生活支援施設の運営にあたっています。

## こどもの傍らに近づくために —実践研究の方法—

相馬 靖明

シンポジウムの企画趣旨によると、研究者と実践者が目指す知は二つの違う山だそうです。宮崎氏は以前、研究者が実践の場に対してTHEYモードとYOUモードとを行きつ戻りつする様子をレポートされています。とすれば、二つの山は別々でも、実践研究とはそこを行きつ戻りつするイメージなのでしょうか。しかし、二つのモードの問題は、実践の現場側が研究者に対してどんなモードなのか、ということでもあると思いながらこのシンポジウムを聞きました。

加用氏の話からは、加用氏自身はTHEYモードで「そのへんのおっちゃん」であろうとしているのに、保育の現場からはYOUモードで迎えられている様子を感じました。

佐木氏の話は、「私」が他の保育者たちとアーティストとの協働をコーディネートしていく、という話でした。保育者たちと「私」のYOUモードをいかにして作り上げるのかに腐心されている様子がかがえました。保育者・子ども・アーティスト・「私」がどのように取り結ばれているかを俯瞰した図で説明されていましたが、俯瞰すればするほどTHEYモード色が強まって聞こえてきます。しかし、私が受け取ったほどのTHEYモードではなく保育の日常は進んでいるのでしょうか。

石黒氏の話は、幼稚園の預かり保育の時間に「このようにすると、こんな学びが起きるはずだ」と、例えば「アリになってみる」ということを学生たちとやってみたことの報告でした。何かになってみることで、その対

象のことがいつのまにかわかってしまう、とのことです。が、なってみる対象を誰が決めるのかという疑問をもちました。氏自身もそのあたりは感じられていたのか、ボランティアの学生たちの方にこそ「保育者になってみてわかった」ということが実は起きていたのではないかと述べられていました。

以前、遊び心の大切さを感じ取る継続的なワークショップに参加した時の経験です。回を重ねるごとに、参加者同士に「遊び心の落とし所」が見えてきてしまうのです。実は、そのような状況を揺り動かしてくれたのが「新参者」でした。次第に、自らの固定化しつつあるフレームを感じる一方で、そのことをどう新参者が揺り動かしてくれるのかを楽しみ出す、ということが起きてきました。そうすると新参者に対して古参者が遊び心の大切さをファシリテートすることは消えていきます。

研究者・アーティスト・学生たちとの協働によって、実は、保育の日常を揺り動かされることを楽しんでいる保育者たちがいたのではないかと想像しながら、シンポジウム の話題を聞きました。(研究者やアーティストを新参者扱いしてしまう保育者がいるかどうかは別にして。)

次回があるならば、ぜひ保育の日常を揺り動かされることを楽しんでいる(あるいは、楽しめないでいるかもしれない)保育者の側からの話題として聞いてみたい、と思いました。

#### ●Profile

相馬 靖明 (そうま やすあき)

東京家政大学大学院家政学専攻科児童学専攻修士課程

昨年、幼稚園を退職し大学院へ進みました。小学校との連携が行われている保育現場をフィールドにしています。連携や協働の場に立ち現れる保育者・教師の思考過程に光を当て、そこでは一体何が起きているのか、なぜそれが起きたのかを知りたいと思っています。

## 第58回大会に参加して

中西 利恵

リニューアルされた『日本保育学会会報』第132号が届きました。編集後記に記された発行趣旨はもちろんのこと、それぞれの企画、特に特集「これからの保育学会に期待すること」はていねいに読みました。この原稿はそれに続くリニューアル第2号(第133号)掲載分ですので、いつにもまして責任を感じて書いています。

さて、保育学会大会に参加していつもまず感じることは、いったいどこまで大規模化するのだろうかということです。大きくなることは良いことなのでしょうが、そのような状況下での開催校の企画運営パワー(ハード面もソフト面も)にはただただ感嘆させられます。今回の大

妻女子大学も同様です。田舎の小さな短大の教員には、まずは大会そのものが良い意味でのカルチャーショックです。本大会の企画はどれも興味深いものでしたが、その中から私は大会準備委員会企画シンポジウムⅣ『こどもが父母・保護者・地域社会と一緒にいられるために～そのための制度と経営を問う～』に参加した感想を述べます。

久保田先生の企画はいつも意外な分野の方や、よくぞ出演許可が取れたと思うような方が話題提供者として登場されます。今回もそうでした。実はそれは本大会のメインテーマにそった「人々の生きる現実身近に接しつつ、その現場に深く関わる立ち位置からの問いかけに、耳を傾けることのできるよう」(大場幸夫、2004年9月)なシンポジウムの実現を追求した結果であると、参加してみてあらためてつくづく納得させられました。話題の提供とはいえ、得てして結果(結論)を大事に考えてしまいがちですが、どのお話からも結果だけではなくむしろプロセスでどのような議論がなされてきたかが良く見え、したがって聞くほどに関心が高まりました。さらにそこに教育制度論の専門家(指定討論者)の立ち位置から問いかけが入り、一見かみ合わないようですがそれがかえって新鮮であり、まさにさまざまな領域の交流が誕生していたように思います。問題提起もあちらこちらに埋めこまれており、聞き手が発掘するようなアプローチはより生産的でもありました。実際、質疑応答の際に質問されたフロアーの方々の所属の多様さ(留学生、公立幼稚園・保育園の先生方、市職員、大学教員など)や、するどくて切実な質問内容(例えば、そもそも制度は必要か、など)から見ても、「学会はことばを媒介にして、お互いの一致点、相違点を明確にしていく営みである」(小川博久、日本保育学会会報第112号)が実践されたシンポジウムだったと思います。

冒頭で企画者が“accountability”とは、結果に対する説明責任だけではなく、目的に対する責任も示すことを語られました。「なんでもあり」の発想で突き進む子育て支援に歯止めをかけるためにも、子育て支援の目的(子どもに対する責任)を見据え、「この子育て支援、やらない方がいいんじゃない。」と言える知見を持ちたいと思います。

#### ●Profile

中西 利恵 (なかにし りえ)

湊川短期大学幼児教育保育学科教授。

行動分析学を専門とし「子どもの育ちと遊び」について父子・母子関係を対象に研究してきたが、最近では保育者養成校と保育現場との連携を生かした子育て支援や、保育者養成教育の実際と現場での保育実践をもっとリンクさせた学習環境の開発に取り組んでいる。

## 子どもの傍らにいる大人になるために —実践研究者になる—

管田 貴子

企画シンポジウムの中でも、「実践研究者になる」というサブタイトルを見て、特にこのシンポジウムに関心をもった。自分自身が幼稚園・保育所において参与観察をしているからである。保育現場に足を運びながらも、「子どもの傍らにいる」とはどういうことなのか分からないままシンポジウムに参加した。

西原彰宏氏は、「傍らにいる」ことには二つの層があるとし、第一の層とは子どもから保育者が信じられ、意味があるために「傍らにいる」というもの、そして第二の層とは、「傍らにいる」ことはそれ自体に価値があり、傍らにいてもらうことが生きることそのままであるというものであった。

戸田雅美氏は、西原氏の「傍らにいる」ことの二つの層に基づけば、第一の層にあたるとして、日常的な母子や保育者と子どもとのかかわりの例を挙げた。母子間のかかわりからは、「子どもはこちらがどう見ているかをキャッチして、生活しているのでは」と述べた。また保育者は日常的に子どもの「傍らにいる」ことで、個々の子どもの性格を把握し、どうしたら満足感を得るのか知っているという指摘であった。

岡健氏は、西原氏が挙げた第一の層に関して、保育者が子どもに対して、「こんな世界もあるよ」と惹きつけるような企てがあっているし、なくてはいけないと述べた。また第二の層については、データや証拠も必要であり、言葉にしていく必要があることを指摘した。

フロアからは、「子どもの傍らにいる保育者はいないのではないか」との意見が出され、「一緒に生きてくれる人、受けとめてもらえる場がないから、子どもの生命に危機をもたらすのではないかと」の声が挙がった。戸田氏より「理解することは方法にできるのか」、「第一、第二の層とは何か」という疑問が提示され、議論は次回に持ち越された。

大人が子どもの「傍らにいる」ことは、子どもが「生きることそのままである」という解釈に従うならば、保育者を含めた大人の基本姿勢であると感じた。しかし、大人は限られた時間と持てる精神的な余裕の中で、個々の子どもの「傍らにいる」のが現状である。子どもの傍らにいたいと願う者でも、子どものためにできること、できないことに直面する。また大人が傍らにいたとしても、そのことが子どもに伝わっていない場合、「傍らにいる」とは言えないだろう。では、大人は傍らにいるこ

とを、子どもにどのように伝えることができるのだろうか。また、大人が傍らにいることが子どもに伝わっているか否かは、どのようにして捉えられるのだろうか。疑問は多い。

一人の大人として、目の前の子どものために何ができ、何ができないのか、できないことは誰に援助を求めるのかということも考えなければ、大人が子どもの「傍らにいる」ということは現実的なものとは言えない。実践研究者として子どもの「傍らにいる」ということは何を意味するのかについても、今後考えながら参与観察を続けていきたい。

### ●Profile

管田 貴子 (かんだ たかこ)  
広島大学大学院 (大学院生)  
研究テーマ: 多文化保育、外国籍幼児の日本語習得過程

## 5月は学び列車の乗車駅

野島 恵美子

学会参加の何日か前に会報132号を手にした時、「あっ!、新しい風!」という思いが体の中を走った。時代・人・思想が、つながる・変わる・流れる……、実にすがすがしい印象だった。新鮮な感覚余韻の中、第59回の保育学会に参加。

私は、両日、150号教室の左後方寄りのあの席に座りっぱなしであった。準備委員会企画シンポジウム・対談は、それぞれに異なった趣旨を掲げていたが、それらの内容は貫通部分を持っており、企画された方々の思いや工夫を感じとれた。主観的なものかもしれないが、今年は何の会にも右脳派タイプのような方が登場されていたことを面白かったことの一つにあげておきたい気がする。往々にして難しい専門用語が飛び交いがちだが、お人柄と言うのか感性的な部分を享けながら学べる時は実に楽しく高揚した気分になれるものだ。私のような田舎っぺ保育者でも、楽しみを感じながら能動的に学べる場を公平に提供して下さるこの保育学会には改めて心から感謝申し上げたい。

こどもの傍にいる者たちが・こどもとの付き合いを避けて通れない者たちが・こどもに近づきたい者たちが・保育者養成に関わる者たちが、共に関心を持ち合い・感じあい・提起し合い・紐解きあいながら、こどもという神秘的な生き物を、より信ぴょう性高く理解し、より理想的な育ちをするための後押しをしていくという協働は、実践者、研究者などというようにやや対立的にとらえていくものではないような気もした。今まさにこの角度か

ら解釈してもネットワークと言えよう。自分の持つ専門性の中に異分野の専門性を取り込んで更なる資質向上を目指すということであり、他者のためになりながら自分自身の人間性を大きくしていくことなのではないだろうか。平たい言い方をすれば、各界もどの業種もそれを求め合っているような気がする。保育士も教師も医師も作家も音楽家も企業もNPOも…みんな協働者なのだ。

私たち現場は時として、実践研修の場に研究者を招き入れる。自分たちの保育観に共鳴してくれそうな人・わかりやすく保育士たちに伝えてくれそうな人・切れ味よく視点を投げかけてくれそうな人・更には失礼ながらあまりお金がかからない人…このような観点の中、考え方や感じ方などの類似性探しをしようのか、嗅覚をおおいに働かせて研究者ゲットへとつなげる。ラッキーなこと、今まで私たちのところにやってきてくださった大

学の先生たちは、実に謙虚な方たちで前記の条件を満たした方達だった。

西原彰宏先生のお言葉をお借りするならば（企画シンポIIIには参加できなかったが）、育てる=育てられる・教える=教えられる・も一つ加えて守る=守られるこんな協働（関係）の中で、研究者の方達には私たち現場を導き続けていただきたいと思っているし、こどもとの日々の関係もこうあり続けたい、こうあるだろうと思っている。

#### ●Profile

野島 恵美子（のじま えみこ）

川根町地域子育て支援センター・児童館

企画シンポのさなかに携帯がなった。小3の娘を持つあるお父さんから。「娘が二晩「死にたい」を連発するので家に来てほしい」というような内容だった。この4月から職務内容が少し変わった自分、わいせつ・不登校…といろいろなことに遭遇している。「ネットワークとは何ぞや?」「小さな町のネットワークと守秘義務」などが今の自己課題である。